

2. 10古地名

廻間村

廻 間	この地名は、丘と丘にはさまれたところからこのように呼ばれたものであり、狭い谷間の地をいう。全国的に分布する地名である。
番賀郷 (はがのこう)	平城宮調査のおり発見された木簡に「尾張国智多郡番賀郷花井里丸部口麻呂」(表)「調塩三斗神亀四年十月七日」(裏)の記録が残っている。この「番賀郷」の位置は、八幡から北の伊勢湾沿岸と考えられ、奈良・平安時代には寺本は番賀郷に属していたと思われる。
額石保	佐布里村の如意寺の大般若経第六百の奥書に「応永三丙子(1396)十二月廿五日於尾州智多郡額石保法海寺」と書かれている。この額石保がのちの寺本四か村全域を指しているのか、法海寺付近の一区画のみを指しているのかわからない。読み方不詳。
寺本庄	廻間村極楽寺の鰐口に「永正六己巳(1509)十一月六日敬白 尾州智多郡寺本保内泉養山極楽寺」という銘があり、戦国時代になりこの地方の呼び名は、額石保から寺本保に改められている。寺本庄の由来については、次の二つの説がある。その一つは、知多郡史によると法海寺は、熱田神宮の別院であり、この地方の中心の寺であった。そこで、寺本とは、寺分が転訛したものであるといわれている。その二は、森鷗外の「阿部一族」に寺本八左衛門直次の名があり、先祖が尾張国寺本に住んでいた寺本太郎の子孫であったという記述があり、寺本庄の由来である。また、寺本庄は、寺本郷として一つの領域であったが、慶長十三年(1608)の備前検地において、村高が全体で 5,450 石余にも上がったために村内を廻間村、堀之内村、中島村、平井村の四村に区分した、四か村の総称となった。
八幡村	明治十一年郡区町村編成法の実施にともない、寺本四か村(平井・中島・堀之内・廻間)が併合して八幡村と改名した。この地名は、寺本四か村の氏神である八幡社からとったものである。八幡の地名は全国的に多く分布し「ヤ(多くという意)ハタ(大菩薩の偉徳を示す語)」の意味であり、応神天皇の偉徳を示した語を神名としたものである。
だるま トンネル	廻間村の北東にある筒岡池の近くに、だるま形をした長さ 30 ㍎、幅は 2 ㍎半位のトンネルがあったが、昭和の初め頃にとりこわされてしまった。廻間の人たちは、この道を新道といていたが、この道も今は団地造成のためなくなってしまった。
大門 (だいもん)	今の極楽寺の前の道を大門と呼んでいた。昔は天台宗であって、極楽寺の境内はもっと広く、そこに極楽寺の大きな門があったのでこの名がついたといわれている。
お社口 (おしゃぐち)	現、八幡字種池三四(廻間)の西隣の道端に、15 坪程の空地がある。ここを「おしゃぐち」と言っている。ここで、天王祭を催していた。

堀之内村

堀之内	中世の豪族屋敷村の代表的地名で、館を中心とした集落周囲を防御的な堀で囲った地をいう。堀之内には、戦国時代、花井氏の本拠である寺本城（堀之内城）があり、栄えていた。
郷倉の辻	堀之内には、尾張藩の郷倉（備荒貯蓄のために設けられた共同穀倉）が、約 30 坪の平家建瓦葺きで建っていたので、この入口付近を今でも郷倉の辻と呼んでいる。
坊主山	堀之内村の東方にある山で、昔から日照りが続くと雨乞いを行なった場所である。別名薬師山とも呼ばれていたが、団地造成のためなくなってしまった。
荒 井	堀之内の枝郷であり、江戸時代の初期、荒地を開拓して居住したのでこの名がついた。荒井は新居、新井、荒居などと書き、全国的に分布する地名でもある。

中島村

中 島	ナカシマ（中妻・中間）ともいい、川流の間の地や流域の中央の土地などの意味に用いられている。かつて中島村の囲りは、入り江にかこまれた島のようになっていたのでこの名がついたといわれており、また、中島村の南一帯は沖中とも呼ばれていた。
御門 （みかど）	中島公民館の東南で、高貴な人の屋敷があったとも、また法海寺の東門に由来するともいわれる。
隅屋 （すみや）	法海寺の東北の角に建物があつたので隅屋とよばれていた。今の山口歯科医院の東の辺りであった。
堀端 （ほりばた）	大乘院から南東一帯の地に法海寺の堀があつたのでこのように呼ばれていた。
太郎池	八幡小学校の講堂のうら辺りにあつた池の名であり、法海寺の用水として利用されていた。
次郎池	八幡小学校の北方にあつた池の名であり、法海寺の用水として利用されていた。
大細明 （おうざいみょう）	中島の天白社前と野間海道の間を言う。そこに一丁歩余の田があり、この大きな田には中に一本の畦もなかった。他の地主との境界線は、苗の株間をこまかく構えて区別をしていた。
小細明 （こざいみょう）	権現堂から八幡農協へ行く道の東の田を言う。大細明の田より面積が少ないが、この田には畦がない。なお、この田の片隅から、縄文時代の人骨が出たことがあつた。
奥の坊	八幡公民館の西側を言った。昔、ここに法海寺の管長が住まっていた坊があつた。
野間海道	源頼朝公が、父義朝公の法要をするために通られたという道で、中島の権現堂より、光明寺付近までの道をいっている。野間海道は、別名沼垣内（ヌマカイト）ともいわれており、この辺り一帯は、大雨のとき水びたしとなり、難渋したことを物語ったものともいわれる。
荒 古	中島村の枝郷であり、江戸時代の初期、荒地を開墾したのでこの名がついた。「アラキ（新墾）」の方言化した地名である。

一之坪	八幡神社の南方一帯をさし、江戸時代に米の作柄を調べる時、この地方で最初に坪刈りをしたことから、この名がついたと思われる。また一之坪は、条里制における一坪の大きさを示し、呼称の起点でもあった。
神の木	八幡神社の並木西側、農協より東の田付近をしめしていた。
大 塚	今の寺本保育園の付近に中島村の墓地があり、大塚と呼ばれていた。この塚は、堀之内城が落城した時多くの戦死者が出て葬ったあとであるとも言われている。今は、そこには墓地はなく地藏さんと榎の大木が残っているのみである。
水代 (みずしろ)	その昔、中島村の回りは入り江にかこまれており、その辺りを水代と呼んでいた。名鉄常滑線を境に東水代と西水代とに分かれている。
小根 (おね)	中島の枝郷であり、海岸近くの神明社に氏神がまつられている。古くから漁業を中心とした地であり漁小根(すなどりおね)とも呼ばれていた。その地の由来は、海岸の小高い砂浜の連なっていたところからついたものと思われる。中小根、浜小根の字がある。
日暮らしの森 (ひぐらしの もり)	今の神明社一帯は、日暮らしの森と呼ばれ、松やクス・エノキの大木が生い茂っていた。参道の両側には、二抱えもある松の木が数十本もあり、沖からよく見えた。昭和三十四年九月の伊勢湾台風で大被害をうけたが、今でも昔の面影を残している。神明社は古くは、日暮ノ宮と呼ばれ、この境内には、原始的な祭場である磐座(いわくら)を残している。
琴弾の松 (ことひきの まつ)	琴弾の松は、神明社の東にあつて、その昔、新羅の国王の太子が、熱田神宮の宝刀を盗んだ罪で国外追放になるが、その船が寺本の海岸(神明社付近)の日暮らしの里に流れついた。太子は望郷の思いを付近にあった松の大木の上で琴をかなでて慰めていた。このことからこの大松は琴弾の松と呼ばれるようになったといわれている。
堀 切	生活が安定し、米作りが盛んになった江戸時代、田が少しでもほしい寺本は、川を開いて中島川を造った。この中島川のお陰で寺本地区は米がよくとれるようになった。中島川を切り開いたことから、この辺りを「堀り切り」と称した。今は、この川は、暗渠にされ、その上を名鉄常滑線を跨ぐ道路ができたので、昔の面影はなくなってしまった。
柿の木	西水代と月山の両字の接する付近をさし、多くの柿の木が植えられていたのでこのように呼ばれていた。
供養場 (くよば)	江戸時代、神明社のうらの浜では、毎年秋に知多西浦14か村の大供養が行われた。この念仏虫供養の場所を供養場といった。

平井村

平 井	たいらな土地に人が集まり住みついたところからつけられたものであり、平居とも書く所がある。
清水屋敷 (しみずやしき)	現在の左脇地区内で、「清水屋敷」と呼んでいる昔の地名の名残がある。その由来は、左脇百五番地の田の一隅に井戸があって、常に清水がこんこんとわき出て、どんな干天続きでもかれることはなかった。また、かつてここに法善寺があったので、「法善寺さんの井戸」ともいわれ、現在でもきれいな水が湧き出ている。
御嶽山	八幡中学校の南西方、石段を 130 余段上った小高い丘の上に御嶽神社がある。明治十三年十二月八日、信濃の国、御嶽神社の分霊を受け、両平井の守り神としてまつようになった。このため、この丘を御嶽山と呼ぶようになった。
汐海道 (しおかいどう)	三月の節句の塩くみなど法海寺の行事に使うための水を、平井の浜へ汲みに行く道を汐海道と呼んだ。
観音脇	栖光院の観音堂にちなみ、そのまわりを観音脇と呼ぶようになった。観音池も同じ由来である。
杉 山	平井村の枝郷である。杉のはえた山は特に見られないが、ゆとりのある村であった。
清水ヶ丘	法海寺と神功皇后社を結ぶ一帯を大昔「山階郷清水岡と称せられていた。この地帯から清水の湧き出る井戸が三つあり「平井の三井」と言われ、このあたり一帯が開発されたときに、地名がつけられた。
山 崎	杉山組の入口で、今の八幡小学校の丘の東にそった地域をいう。小学校の場所には、かつてカブト山と称する高い山があった。
番所前 (ばんじょまえ)	杉山組の中央であり、前屋敷と裏屋敷にわかれている。昔、番所があり、岡田、大野、佐布里の里道を見張っていた。
八反坪	長曽橋の南の水田地帯の中心で、この付近の水田は規則正しく区画され、古代の条里制区画の遺構とされている。坪の名もその理由によるものであろう。
普ヶ脇 (ふがわき)	杉山組の西の谷で中央に同名の大きな池がある。池の堤からみて奥にカンゼ山が突き出している。杉崎、杉下一統の山之神がまつられていた。
奥	杉山組の中で一番奥にあったのでこの名があるが、本覚寺より神功皇后社と、神功皇后社から森下池までの西と東にわかれている。
筒井前 (つついまえ)	杉山組の番所前の東にあたる水田地帯の地名である。現在では井戸、水路のようなものは知られていないが、水利がよい点から呼ばれたものであろう。
森 下	ワンド形をした谷頭は、自然の密林をなし、中央に湧水を集めた森下池ができている。池の名も地形からできたか、自然の溜池である。
西ノ奥	神功皇后社の東方にジョウヤマと称する台地が舌状にのびていて、西ノ奥は、台地の背でわけた西側のワンドであり、底深い水田が長く続いている。
前の神	杉山組の代表的な山で、今のつつじが丘小学校付近にあたる。山之神がまつられ、山頂は平たく、子どもの遊び場であった。山の神をまつる山には、番所前の西に裏の山という山があった。

大無所 (だいぶしょ)	八幡中学校の東だれ、今の八幡プールの西付近には、終戦まで忠魂碑が立っていた。それ以前は大きな墓地があって、六文銭が出土したり、雨の日に隣のものをみている。墓は明治三十七年に小学校ができたので移転した。
古池の道 (ふるいけのみち)	杉山組の山崎から番所前にいたる道は、水田地帯を横切る畷（ナワテ）であった。真中に古池と称する水たまりがあり、ナマズ、ウナギなどが捕れる子どもの遊び場であった。
石橋道	杉山組から佐布里の西谷に行く道の途中、水田地帯の中に石橋がかけられている所があり、古くからこの道を石橋道といった。
種池 (たねいけ)	江戸時代各村には、田植えの時期に米の種粃をひたすために利用した共同の種池があった。これが地名として残ったものである。